

[005] 決断科学表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1917856>

出版情報：決断科学. 5, 2018-03-30. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン：
権利関係：

巻頭言

「持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム」は、人文社会科学、生命科学、理工学を統合した教育によつて、専門分野の枠を超えて全体を俯瞰し社会的課題の解決に導く高度な人材を育てなさいという、文部科学省が考えたとんでもない無茶ぶりに応えるために立案された大学院博士課程5年間の教育プログラムです。このプログラムを立案するにあたり、私は徹底した現場主義で学生を育てようと考えました。大学の先生は、すぐに学生に勉強をさせたいがります。たとえば「専門分野の枠を超えて」という要請があると、自然科学の学生には社会科学を学ばせ、社会科学の学生には自然科学を学ばせると、というような学際教育のコースを立案しがちです。

しかし、そのような机の上の勉強だけでは、社会的課題の解決をリードする人材が育つはずがありません。社会的リーダーになるためには、現場の課題に継続して関わり、課題を頭だけでなく実体験を通じてしっかりと理解し、課題に関わる現場のさまざまな関係者と粘り強く対話を重ね、関係者と一緒になつてプロジェクトを動かす経験を積むことが不可欠です。そして、地域や世界の現場から学び、その学びを普遍化してはじめて、社会を変えていく博士人材が育つでしょう。この考えにもとづき、「持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム」では、環境・災害・健康・統治・人間という5つのテーマについて、現場の課題解決に長期に関わり、現場の関係者の

矢原 徹一

方々と信頼関係を築きながら研究に取り組んでいらっしゃる先生方を集め、これらの先生方の現場で学ぶという教育方針を採用しました。これらの先生方がリードされているプロジェクトを「プロジェクトZ」と呼んでいます。この名称には、NHK番組プロジェクトXで取り上げられた事例のさらに先をめぐし、先生方の情熱が伝染するプロジェクトにしたいという思いがこめられています。同時に、少し遊び心が入ったネーミングをすることで、楽しくやろうというねらいもありました。

この特集号では、出水薫、高尾忠志、比良松道一、花松泰倫という4人の先生方が中心になって、対馬市、長崎市、佐伯市、八女市という4つの自治体の現場で取り組まれてきた「プロジェクトZ」の経緯や成果を、対談形式でまとめました。対談をお読みいただければわかるように、4人の先生方の情熱と、地域のリーダーの方々の情熱がつながり、そこに学生が関わることでさらなる化学反応が生まれ、すばらしい学びの場が生まれました。学生たちは、継続的に地域に関わり、地域の方々と一緒にプロジェクトに取り組む中で、リーダーのビジョン、

情熱、実行力の大切さを、身を持って学んでいます。5年前にこんなプログラムができたらと思いい描いた夢が、現実になって進行していることに、胸が熱くなる思いです。

プログラムが本格的にスタートしてから4年あまりが経過し、学生が取り組んだプロジェクトの成果が形になるケースも生まれてきました。自治体がかかえるさまざまな課題は、少子高齢化に代表される構造的な問題とつながっているのです。その解決は容易ではありません。しかし、教員も学生も自治体関係者も、一連のプロジェクトでの協働経験を通じて、地域の未来に明るい希望と確かな手ごたえを感じています。もちろんさまざまな課題もあります。この対談で語られている到達点と課題を共有することで、さらに次のステージに進んでいけるでしょう。これからも各自治体の関係者の方々との対等な協働を進展させ、地域の課題解決に少しでも貢献するとともに、次の時代をなう地に足のついた人材養成にとめたいと思います。

(九州大学教授・決断科学センター長)